

多摩川源流域周辺の位牌分け —特色と村落構造との相関をめぐって—

社会学研究科社会学専攻博士後期課程修了

立柳 聡

要旨

位牌分けと呼ばれる「故人の位牌を複数つくり、他家に配ったり、他家から配られた位牌を祀る」慣わしが注目されてきたが、著者の研究により、多摩川源流域に位置づく山梨県小菅村小永田にも分布することがわかった。当地の位牌分けを介して強調される人間関係は、実の子どもとキョウダイであり、正にミウチと称される最も重要と捉えられている親族と概ね一致するとみられる。さらに、ミウチは、小永田というムラで生活していく上で生じてくる様々な互助協同の機会において、隣保組と並んで、そのための主要な対象となる人々・家でもある。すると、位牌分けによる他家の先祖や当該戸から他出した者の位牌を祀ることは、小永田で伝統的に、また、日常生活において、最も重要と見なされてきた親族を、仏壇に手を合わせる折々に想起させ、そうした人々との関係を大切にしていくことを動機付けているのではないか。もって、村落構造を支持する機能を果たしているとみられる。

キーワード

位牌分け、ミウチ、姻戚、互助協同、村落構造

目次

- I 問題の所在
- II 調査地と調査の概況
- III 方法
- IV 族制慣行の特色
 - A 親族をめぐる認識
 - B 家の創設と相続
 - C 分家の実態と本分家の交際

V 自治の仕組みと互助慣行

A 地区の区分と隣保組

B 互助慣行

1 病人の搬送

2 介護

3 屋根替え（茅葺屋根の葺き替え）

C 小括—援助を求める主要な対象者—

VI 小永田の位牌分け

A 概要

B 位牌を配る対象者

VII 考察と結語 —位牌分けと村落構造との相関—

I 問題の所在

日本における祖先祭祀や族制慣行の研究において、「故人の位牌を複数つくる」慣わしが注目されてきた。位牌分けと呼ばれるこの慣行をめぐっては、「一人の死者に対して複数の位牌を作り、複数のまつり手に分ける慣習。一般には親が死亡した時に子供の人数分の位牌を作り、子供全員に位牌を分ける形態をさすが、死者の親族や近隣、知人などに戒名を記した紙位牌を配る形も広い意味ではこの中に含まれる。主な分布範囲は、静岡県東部から山梨・長野・群馬・栃木・茨城・福島県南部までの中部・北関東一帯と利島などで、位牌を分ける際にはさまざまな儀礼的手続きを伴う。…一般的な位牌祭祀との相違点は、家の系譜的先祖である父方・夫方の位牌に加えて、各世代で他家から持ち込まれた母方や妻方の位牌をあわせまつる点にある。母・妻方の位牌を特例としてではなく、制度的に祭祀対象に組み入れている点は特に注目される。」ⁱ⁾と紹介される「親終い」（オヤシマイ：「栃木・茨城・福島・山梨などの各県で、親の葬儀、およびその執行を子供たち全員の責務とする一連の儀礼的手続き…」ⁱⁱ⁾）の一種である。また、未解明な研究課題とみられることとして、「位牌分けを成立させている社会的条件についてはいまのところ定説はない。…」ⁱⁱⁱ⁾とも指摘されている。こうした研究史に示唆されるように、以前から、丹波山村や上野原市といった山梨県の東端地域にも、位牌分けの慣わしの分布が知られていたが、それに隣接する小菅村にも、概ね村全域に分布していると見られることを、著者は近年の民俗調査によって初めて確認した。その意味で学史的にも重要な事例と考えることから、最も集約的な調査を行った小永田のデータに基づいて、その特色を析出すると共に、位牌分けを成立させる社会的条件の解明を念頭に、当地の村落構造との相関を考察しようとするものである。

Ⅱ 調査地と調査の概況

調査地である小永田は、山梨県の東端に位置する小菅村を構成する八つの地区（字、ムラ、自然村とみられる。以下、小永田、または、ムラと称する。）の一つで、長らく村の中心部から最も山奥に位置する袋ムラであった。自治会加入戸数は38となっているが、絶家や長期不在の家が増えており、現存する実質的な戸数は31と思われる。38戸の内、23戸がF姓であり、他にS姓（3戸）、KS姓（4戸）、A姓（1戸）、N姓（2戸）、FR姓（2戸）、H姓（1戸）、KW姓（1戸）、O姓（1戸）がみられ、これらがムラ組とみられる八つの隣保組に組織されており、葬儀等、近隣互助協同の中核として機能してきたことが知られる。伝統的な生業は、麦の栽培、並びに、アワ、キビ、ヒエ、サド、アカモロ、ソバといった雑穀の栽培による農業であり、特に、ソバは夏季に焼畑による生産が主体であった。この他、ジャガイモやコンニャク、ワサビの栽培、養蚕も多くのムラ人に記憶されていたり、現在も栽培されている。平地がない山間農村であり、田は昔からほとんど存在しなかった。これまでの調査から、財産保有や小作経験などの生業実態に照らし、家々に経済的な家格差が認められる。^[v]一方、大正7年（1918年）当時のムラの総戸数は39であり、その後、昭和56年（1981年）に、46戸まで増えたが、約1世紀の間、ほとんど変化していない。^[vi]一つ一つの家が巧みに維持されてきたとみられる。^[vii]総じて、山間過疎地の零細ではあるが、共同性の強い穀類を中心とした畑作農村の姿が浮かび上がってくるように思われる。^[viii]

なお、データ収集のための民俗調査^[viii]は、2015年7月から2016年5月にかけて行われた。本稿は、26戸（実質総戸数31）の世帯調査から把握されたデータに基づくものである。

Ⅲ 方法

自然村、ムラ、字などと呼ばれることが多い日本の地域社会の多くは、伝統的に農業に依拠して作られた共同体の性格を有してきた。各戸が田や畑といった耕地を財産として土地に縛られ、近隣で代々一緒に生活を続けることによって形成された。分家、ムラ内婚、仮親の制度等を介して、地域社会の中に親族が多々存在し、何らかの規範の下で交際したり、互助する状況を生み出す（族制慣行：村落構造の規定要因その1）と共に、非親族戸とも、生業や日常生活、冠婚葬祭等の場面で頻繁な近隣互助協同を繰り返し、共属感情を高めつつ、自治を行ってきたが、そのあり方（近隣互助と自治の仕組み：村落構造の規定要因その2）とも関わって、さらには両者（その1と2）の相乗効果として村落構造が育まれてきた。

位牌分けもそうした族制慣行の一つとみられることから：

- ① 筆者の先行業績^[ix]に基づいて、小永田の族制慣行の特色を要約する。
- ② ①と同様に、小永田の近隣互助と自治の仕組みの特色を要約する。
- ③ 民俗調査のデータに基づいて、小永田の位牌分けの実態を集約し、特色を把握する。
- ④ ①、②と③の突き合わせを行い、小永田の村落構造と位牌分けとの相関を考察する。^[x]

IV 族制慣行の特色

この点に関わる筆者の先行業績を要約すると、概ね以下の特色を指摘することができる。

A 親族をめぐる認識

シンセキ： 親族一般を意味するとみられるが、その大半は姻戚である。

ミウチ： 「一番大事なシンセキ」などと説明される。最も懇意な親族とみられる。

実態的には、各世代の世帯主の配偶者の実家、及び、各世代の世帯主とその配偶者それぞれのキョウダイ（兄弟姉妹）の婚家とのつながりが重要と認識されているとみられる。結局、同世代、近い世代の姻戚戸が重視されている。

なお、いつの時代に形成されたかわからないほど古いつながりや出自の共通が信じられている家が多いことに象徴されるように、親族を認識する世代深度は深い。

B 家の創設と相続

家族形成の理想は直系家族制である。

相続の基本は長男相続である。

分家の創設者の主たる担い手は、次男、三男であり、女子は基本的に婚出する。

両養子（夫婦養子）の慣行が繰り返されてきた。

伝統的な通婚圏： 小菅村内を中心に、隣接の上野原市、丹波山村と通婚が多い。

このため、嫁に出た娘との折々、日常的な接触、行き来が可能であり、それが後掲の互助慣行を成立させる重要な背景になったとみられる。

C 分家の実態と本分家の交際

分家を出すことは容易ではない。（分ける財産がないので、出したくても出せない。）このため次男以下の男子の処遇が難しく、実質的な分家の創出として、両養子の慣行を広めた可能性が高いとみられる。

分家は、本家の畑の一部をもらい、自分で家を立てて新たな家の生活を始めたといった事例が多い。その上で、古い時代は畑を本家と共用する（一緒に耕作し、収穫を分け合う）状況も間々あったとみられる。もしくは本家の土地を半分もらう均分相続であったとみられる。このためか本家と分家の間で顕著な経済的力量差は見出しにくい。

比較的経済力のあるとみられる家でも、分家は1戸だすのが精一杯とみられ、分家から孫分家が出るのは、極めて稀な事例である。（現状、孫分家格の家は1戸のみである。）このため同族のような親族戸の集団は作られにくい。

本分家関係の家の交際は、正に本家と分家、概ね二者間のものである。農作業を互助したり、一緒に墓掃除をしたり、折々に収穫物を提供しあったりなど、系譜でつながる誼を介した仲間的な付き合いを折々にしているが、大きな困難に対処する絶対的な拠り所ではないとみられる。こうした互助協同の主要な対象は別に求められることになる。

なお、日常生活における手間替的な互助協同の対象を親族に求める場合は、姻戚である場合が多い。

V 自治の仕組みと互助慣行

A 地区の区分と隣保組

小永田は、山の斜面に沿って上下に広がっているため、集落（複数の家が集合したところ）を単位に区分すると、小永田地区（1～6 隣保組が所在）、浅久保地区（7 隣保組）、吉野地区（8 隣保組）となる。

隣保組は、標高の高い方から近隣戸が数軒ずつまとめられ、作られてきたと伝わるが、現在は、7 隣保組の2戸を最少に、最大は8 隣保組の11戸までばらつきがみられる。他の隣保組は、3～5戸の構成となっている。特に隣接する隣保組（1と2、3と4、5と6、7と8）同士は、葬儀に際して助け合うことになっており、他の隣保組とは異なる特別な意味を持つ存在である。伝統的には、婚礼の際の互助も担っていた。

なお、各隣保組は、本分家関係でつながる家同士が含まれる場合もあるが、複数の姓の家から構成されている。文書の回覧など、情報伝達の単位であると共に、日常的な生活全般にわたる互助の仲間であった。お日待ちを行う隣保組もある。

B 互助慣行

紙幅の都合で典型的とみられるインフォーマントの言説を踏まえ、これまでの実態を紹介してみたい。（ ）内は、インフォーマントの生まれ年である。

1 病人の搬送

「昔は駕籠に乗せて、隣保組が中心になって奥多摩まで運びました。大変なので、シンセキや分家の世話にもなりました。」（昭和8年生）

「昔はみんなで籠に乗せて担いで上野原まで行きました。隣保組の人を中心に、近隣のお願いできる男の人に担いでもらいました。」（昭和24年生）

「昭和40年代は救急車がなく、家の車で運ぶか、持っている人に頼みました。シンセキで手伝いあいました。」（昭和13年生）

2 介護

「おじいさん、おばあさんともこの家で看ました。村内にいる子どもたちが折々にやってきて助けて暮れました。やはりシンセキ、家族でないと。近くにミウチがほしいですね。」（昭和8年生）

「夫の介護をした。脳梗塞になって8年ほど。デイサービスの力も借りたけれど、基本は家で見た。私が一人で見た。」（昭和3年生）

「小菅村にも2000年頃にデイサービスができましたが、それ以前は専ら自宅でみたものです。ほとんど主婦、嫁頼みの介護です。時々、娘が帰ってきて手伝ったりします。」（昭

和24年生)

「隣保の人たちも助けてくれますが、下の世話はできません。主婦と嫁が大変でした。」(昭和10年生)

「もっぱら主婦と嫁の仕事。それと村の中にいるキョウダイ衆が来てくれました。オムツなどなかったし、あってもムラの中で売ってない。大月へ行けるようになったので、とても便利になりました。」(昭和17年生)

「昼はデイサービスへ行くので助かりますが、帰ってくると大変。寝返りがうてなかった。嫁の負担がとても大きかったです。どうしても時は、近所にいるオバを頼りました。」(昭和30年生)

「平成時代になって、実の母の介護をしました。実家の近くにいたので、娘として、自分が介護の中心になりました。」(昭和28年生)

3 屋根替え(茅葺屋根の葺き替え)

「40年くらい前まで(概ね1970年代まで)は茅葺屋根の家があった。お祭りをする山から茅葺をたくさん刈ってこなければならなかった。葺き替えの順番を決めて、ムラ中の人たちが互いに人足になって助け合った。ニンソクにはご飯だけ食べさせて御礼にしました。」(昭和3年生)

「30年くらい前までは茅葺屋根の家でした。山へ入ってススキをたくさん集めてこなければならぬので、小永田中の人たちにお願ひすることになります。毎年、順番で葺き替える家を決めて、お互いに助け合ってきました。」(昭和16年生)

C 小括—援助を求める主要な対象者—

本質は、「困った時に真に頼りがいのあるムラ内の最も重要な存在・人間関係と捉えている者」と理解できるであろうが、A、Bを踏まえると、以下のように集約できよう。

- ・シンセキ、実質はミウチ(特に世帯主のキョウダイ)
- ・実の子ども(特に近隣に嫁いだ女子)
- ・隣保組

VI 小永田の位牌分け

「比較的古い位牌を有している。」「故人や配ってきた家との関係がよくわかる位牌を有している。」「配り先や配った位牌のことをよく記録している家」といった要件を念頭に、それに合致するとみられる四つの家で祀られている他家の位牌と他家に配った位牌の情報を踏まえて検討してみたい。^{xi}

A 概要

これまでの位牌分けの研究で主に注目されてきたと筆者が認識している事項を分析指標に整理すると、四つの家の位牌分けに概ね共通することを表1のようにまとめることができる。

特記事項は脚注で紹介したい。

表1 位牌分けの概要

歴史	江戸時代までは遡るとみられる。 ^{xii}
位牌の形状	伝統的には紙位牌
作製者とその時期	葬儀後、喪主が宝生寺（小菅村中の全戸の檀那寺・臨済宗）の住職に必要な柱数を依頼し、四十九日までに作ってもらう。 ^{xiii}
配布の時期	伝統的には四十九日法要時
配布対象者	詳細は別紙参照。 「亡くなった人の子どもとキョウダイに配る」と説明するインフォーマントが多い。
供養の方法	塗り位牌の形をした板の上に次々と貼り付けていくか、仏壇の壁に、同様に貼り付けていく。この場合は、他家の先祖の位牌は右側の壁に、その家から出た者の位牌は左側の壁に貼る。
供養の期間	永久。このため、多くの場合、世帯主の妻方、母方の先祖と、結婚や就職して独立した者など、当該の家を出た者の位牌が次第に増えていくことになる。
位牌分けを行う理由・意味づけ	<ul style="list-style-type: none"> ・ どの子どもにとっても自分を生み育ててくれた大切な親であることは同じ。一人に任せるのではなく、キョウダイみんなで供養すべき。 ・ 実家に帰らずとも親の供養ができる。 ・ 亡くなったキョウダイの家に行かなくとも拜むことができる。 ・ ムラ外の子どもの家に行っても、夫を拜めるので助かる。 ・ 仏壇を前にすると、実家のことやあちらの先祖のことを思い出せる。 ・ いろいろな先祖やシンセキ、ミウチとのつながりを思い出すことができる。

B 位牌を配る対象者

表2-1から表5-2は、四つの家について、特に誰の位牌を誰（どういう関係の家）に配ったか、また、誰の位牌を誰（どういう関係の家）からもらったかをめぐる詳細を一覧にしたものである。

B15 (世帯番号・以下同様) 家<分家初代>の位牌分けの実態

表2-1 配布した位牌 (n=1)

世代 深度	故人 (没年)	配布先	位牌の形状
±0	夫(平成5)	小菅村外に出た夫のキョウダイ	紙
		夫と現世帯主の子ども全員	
		世帯主の実家	

Ego=関係をたどる起点となる人： 現世帯主(世帯主と略。以下、同様)

+ : descend - : ascend (以下、同様)

表2-2 配布された位牌 (n=1)

世代 深度	故人 (没年)	配布してきた家	配布された 者	他の配布先	位牌の形状
+1	世帯主の父 (未確認)	世帯主の実家	世帯主	嗣子を除く故人の 子ども全員	紙

B22 家<ムラの草分けの一戸>の位牌分けの実態

表3 配布された位牌 (n=7)

世代 深度	故人 (没年)	配布してきた家	配布された 者	他の配布先	位牌の形状
X	不明 (明治8)	不明	不明	不明	紙
	不明 (大正4)				
	不明 (大正13)				
	不明 (大正13)				
	不明 (大正13)				
	不明 (昭和11)	不明	不明	不明	紙、現在は 繰り位牌

± 0	弟 (平成 6)	職出し、独立し た弟の家	世帯主	なし (※)	紙、現在は 繰り位牌
-----	-------------	-----------------	-----	--------	---------------

注： 世帯主の弟の位牌をめぐるは、キョウダイすべてに配られる計画もあったが、B22の現世帯主以外のキョウダイは、すべて故人の家に近いところに暮らしており、日常的に行き来が可能であったことから、日常的に拝めるようにと、遠方にある B22 の世帯主のためだけに紙位牌を作ったという。

なお、B22 の現世帯主の記憶では、「祖父母の時代には、紙位牌を配っていたように思う。」とのことであるが、配布に関わる記録等はこれまでのところ確認されない。

B 6 1 家くムラ草分けの一戸>の位牌分けの実態

表 4 - 1 配布した位牌 (n = 2)

世代 深度	故人 (没年)	配布先	位牌の形状
+ 1	父 (平成 5)	故人のキョウダイと嗣子を除く子 どもの内、希望する者全員	紙
	母 (平成 1 4)		

表 4 - 2 配布された位牌 (n = 7)

世代 深度	故人 (没年)	配布してきた家	配布された 者	他の配布先	位牌の形状
+ 3	母の父の父 (不明)	不明	不明	故人のキョウダイ と嗣子を除く子ども も全員には配られ たと伝わる。	紙
	母の父の母 (不明)				
+ 2	母の父 (未確認)	母の実家	母	故人のキョウダイ と嗣子を除く子ども も全員には配られ たと伝わる。	紙
	母の母 (昭和 50)				
+ 1	妻の父 (未確認)	妻の実家	妻	嗣子を除く故人の 子ども全員	紙
	妻の母 (未確認)				
± 0	姉の夫 (平成 5)	姉の婚家	世帯主	故人と姉の子ども 全員	紙
				小菅村外へ出た故 人のキョウダイ	

B6 2家<ムラ草分けの一戸>の位牌分けの実態

表5-1 配布した位牌 (n=1)

世代 深度	故人 (没年)	配布先	位牌の形状
+1	父 (昭和62)	嗣子を除く故人の子ども全員	塗り位牌

表5-2 配布された位牌 (n=1)

世代 深度	故人 (没年)	配布してきた家	配布された者	他の配布先	位牌の形状
+2	母の父 (未確認)	母の実家	母	嗣子を除く故人の子ども全員	紙

これらのデータを集約してみたい。表6-1と表6-2は、表2-1から表5-2に掲げられた位牌の配布先と配られた位牌に関わるデータを抽出し、どのような関係にある者・家の間で位牌がやり取りされているかを集計したものである。

故人と位牌を配ったり、配られた者(家)との関係

表6-1 位牌の配布先 (n=4)

故人からみた配布先	実数
子ども	1
子どもとキョウダイ	2
子どもとキョウダイと妻の実家	1

表6-2 配られた位牌 (n=8)

配られた者(家)からみた位牌となった故人	実数
親	6
キョウダイ	1
義理のキョウダイ	1

これらから明らかになるのは、位牌のやり取りをする対象者同士は、概ね義理の関係を含め、親子関係やキョウダイ関係にあることである。そうした人間関係が重視されているとみられよう。^{xiv}振り返ってみれば、それは、小永田の人々にとって「一番大事なシンセキ」などと説明される「ミウチ」の実質である世帯主の配偶者の実家、及び、各世代の世帯主とその配偶者それぞれのキョウダイの婚家と概ね重なり合うものである。また、隣保組を除き、最も頼りがいのある互助協同の対象者である「シンセキ、実質はミウチ（特に世帯主のキョウダイ）、実の子ども（特に近隣に嫁いだ女子）」とも概ね重なり合うものである。小永田なり、小菅村の位牌分けの特色であろうか。近隣の位牌分けの慣行との比較などによって確認を急ぎたい。

Ⅶ 考察と結語 一位牌分けと村落構造との相関一

Ⅳ章、Ⅴ章を踏まえ、問題の考察に入りたい。「表1 位牌分けの概要」の「位牌分けを行う理由・意味づけ」の欄を見ると、「どの子どもにとっても自分を生み育ててくれた大切な親であることは同じ。一人に任せるのではなく、キョウダイみんなで供養すべき。」「実家に帰らずとも親の供養ができる。」「亡くなったキョウダイの家に行かなくとも拜むことができる。」「ムラ外の子どもの家に行っても、夫を拜めるので助かる。」といったインフォーマントの見解を確認することができる。正に先祖祭祀のあり方や都合のよさを表現した言説であり、これまでの筆者の聞き書きを振り返ると、小永田の人々の多くが、表向き確かにこうした観点から位牌分けという慣行を理解していると思われる。

しかしながら、当地の位牌分けには、特に村落構造との関係において、水面下で別な機能が働いていると捉えられよう。第一は、位牌のやり取りをする対象者同士は、村落構造の形成に大きな影響力を有する族制慣行における「ミウチ」であり、また、同様に自治の仕組みと互助慣行において、最も頼りがいのある互助協同の対象者である「シンセキ、実質はミウチ（特に世帯主のキョウダイ）、実の子ども（特に近隣に嫁いだ女子）」でもある。位牌分けは現世帯主世代とそれに近い世代に関係が築かれた姻戚を一段と重視する村落構造と正に適合的なのである。位牌のやり取りを行う中で、小永田において重視されるべき人間関係を折々に想起したり、確認することになるものと思われる。

第二は、特に同族的なつながりが形成しにくい小永田においては、日常生活における互助協同は、隣保組の家を中心としながら、親族を対象を求める場合は姻戚となるのが一般的であるから、姻戚の家との懇意な付き合いや関係の維持、強化は重要な意味がある。姻戚の家の先祖も大切に供養する位牌分けは、この点にも貢献していると考えられよう。「表1 位牌分けの概要」の「位牌分けを行う理由・意味づけ」の欄に掲載した「仏壇を前にすると、実家のことやあちらの先祖のことを思い出せる。」とするインフォーマントの言説は示唆的と思われる。

第三は、位牌分けによって配られた位牌の供養が永久に続けられることが有する意義である。この結果、当該戸が継続する限り、祀られる位牌は世代を重ねるごとに重層的に増えていく。従って、誰の位牌であるか記録、記憶されている限りにおいては、特に盆や彼岸など、先祖祭祀の様々な場面や葬儀の折を中心に、多様な先祖なり、親族を思い起こすことが可能になるとみられる。これまた「表1 位牌分けの概要」の「位牌分けを行う理由・意味づけ」の欄に掲載した「いろいろな先祖やシンセキ、ミウチとのつながりを思い出すことができる。」とするインフォーマントの言説は示唆的であろう。また、既述のように、小永田の族制慣行の特色の一つは、親族を認識する世代深度が深いことであるが、位牌分けが有するこうした機能との整合性は明らかである。

このように、当地の位牌分けは、村落構造と優れて相関的であり、それを積極的に支持したり、強化する機能を有する一方、村落構造の影響の下で維持、継承されてきたものと考察した。こうしたことが、位牌分けの慣行を有する様々なムラ一般にどれほど当てはまるのか、今のところ何とも言えないが、位牌分けを成立させている社会的条件の解明に向けて、検証を続けていくことを申し上げ、結びとしたい。

- i 中込睦子、1999年、「いはいわけ 位牌分け」、福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄編、『日本民俗大辞典』上、吉川弘文館、p.126
- ii 中込睦子、1999年、「オヤシマイ」、福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄編、「オヤシマイ」『日本民俗大辞典』上、吉川弘文館、p.287
- iii 前掲 i に同じ。
- iv この点は、以下において、明らかにした。
立柳聡、2016年、「世帯調査のデータとことわざが解き明かすこと—小菅村小永田の社会構造—」、NPO法人郷土のことわざネットワーク・ことネット、『ことわざを楽しく学ぼう、社会・文化・人生』、人間の科学新社、pp.214-227
- v この点について、昭和9年（1934年）生まれで、以来今日まで小永田で暮らし続けてきたインフォーマント（男性）の一人は、「土地も水も限られている。ムラを支えていくのに、減っても困るが増えるのも困る。40戸くらいがちょうどよかった。」と語っている。
- vi 小菅村の総戸数は、宝暦8年（1758年）に190とあり、明治24年（1891年）まで、概ね190戸台を維持してきた。その後、大正7年（1918年）に367戸まで増え、以降、昭和55年（1980年）の374戸に至るまで、314から388までの間で推移しており、平成28年（2016年6月）の現状は、324戸である。小菅村全体としても、長期に渡り、戸数は安定的であることがわかる。この点の詳細は、以下を参照。
守重保作、1981年、『小菅村郷土小誌』、小菅村、pp.12-13

- vii 江戸時代から続くこうした伝統的な特色について、私家版の小菅村誌とも言うべき『うらが村小菅のかきつけ』には、次のように紹介されている。

「…享保15年（1730）年二月、…「村高明細書」でうかがうことができます。それによると文禄三年五六石余だった小菅村の石高は、寛文九年と同じ五九石余で、水田はなく、畑一七町余、山畑七町余、屋敷一町余。家数は一六一で、内土地持の本百姓一二八、地主の敷地内に住んでいた門百姓三〇、土地のない水呑百姓が三。人口は八七二人で、男四四五人、女四二三人、僧四人で、馬が八六匹いました。… 作物は大麥、小麦、粟、稗、芋、大豆、小豆、そばと野菜、それに黍が少々で、養蚕はやっていましたが絹織物は作っていませんでした。 寛文一三年に刊行された、寒河正親の「子孫鑑」によると、当時の一人一日の食い扶持は米五合ということですから、一年間で一石八斗二升五合になります。 小菅村の高五九合は、…しかも半分は年貢ですから、一人当たりの米は年間三升三合五勺にしかありません。ほとんどの村民が米以外の雑穀を主食にしていたわけで、米のメシがいかに貴重品であったかわかります。」「…、いずれにしても小菅村の中世および近世は、何もかもが貧しかったのです。木村礎著「近世の村」に一村当たりのモデル数値があります。それによると 人口は 約四〇〇人 平均村高は 四〇〇～五〇〇石 耕作反別は 五〇町歩前後 で、小菅村の場合、人口が二倍、村高や耕地では約十分の一にすぎません。幕末期の相模国村高表を見ても、最高が二〇〇〇石で二ヶ村。一〇〇～三〇〇石が二九五村で最も多く、平均は約四三〇です。小菅村のような五〇石台の村は四一ヶ村で、約六パーセントに過ぎません。 小菅村は、こんなに小さな耕作地に、平均の倍の人間が住んでいたのですから人々がどんなに働いても貧しかったのです。」

知久正三郎、1995年、『うらが村小菅のかきつけ』、船木芳治私家版、p.33、p.56

- viii 源流域山村研究会「源流域山村における暮らしの変化と介護戦略—奥会津と奥多摩の比較研究—」プロジェクト（代表研究者：立柳聡）の一環として行われた。人口の高齢化が急速に進展すると共に、要介護者が増え続ける日本において、介護のニーズを充足することが一段と難しい状況にある山間過疎地で、伝統的な互助協同の慣行や人間関係を活かした近隣共助による有効な介護施策を構想する研究であり、よく似た環境条件を伴った二つの地域における伝統的な介護や看病、急患対応の実態や背後にある考え方などの調査と比較研究が深められた。

また、民俗調査は、「日本文化人類学会倫理綱領」、「日本民俗学会倫理綱領」と「日本民俗学会綱領にもとづく調査・研究の指針」を踏まえた倫理的配慮の下に行われた。

- ix 立柳聡、2017年、「夫婦養子慣行の背景と機能—多摩源流域—山間農村の社会構造—」、『東洋大学大学院紀要 社会学研究科福祉社会デザイン研究科』、第53集、東洋大学大学院、pp.37-53

- x 族制慣行と並び、小永田の社会構造の形成に重大な影響を与えてきたとみられるもう一つのファクターは、ムラ組とみられる八つの隣保組の組織と機能であるとみられる。この点の概要も脚注ivの先行研究で明らかにしているが、詳細な検討は今後の課題である。「社会構造の一端」とお断りするの、このためである。
- xi 小永田は、昭和30年代初頭までに、2回ないし3回の大火に罹災しており、各戸で祀られていた古い位牌の多くが消失している。
- xii これまでの調査で明らかになった最古の紙位牌は、世帯番号22で祀られていた明治8年のものである。世帯番号61にも明治時代のものがある。
- xiii 分与される位牌は、紙で作られているが、宝生寺にその雛形があり、物故者が出ると、その家の要望を受けて、住職が必要な数だけ雛形の紙に戒名を書き入れ、作られてきた。宝生寺は臨済宗の寺であり、宗派の教えと矛盾がないのか気になる場所であるが、在地の古くからの慣わしと檀家の意向を尊重し、協力してきたとみられる。このため、住職が変わると微妙に態度が異なり、宗派の教えを気にしてか、積極的に作ろうとしない時代もあったと伝わる。
- xiv 四つの家に限定されず、幅広く聞き書きを行うと、「嫁や婿になったり、仕事等の事情で家を出た故人のキョウダイと子どもに配ることが多いようだが、“ほしい人に配ります。”と伝える家もある。また、「両養子（夫婦養子）となって家を出た子どもには配らない。」との伝承もある。他家の血筋に与することになった者として厳格にみなす一つのけじめのようにも思われる。

***Ihaiwake* (custom making ancestor tablet more than one) in the Tama Headwaters : Relating to Characteristics and Correlation with Social Structure of Community**

TACHIYANAGI, Satoshi

Abstract :

In Japan, in case of making ancestor tablet, it is only one generally. But in some of communities located in the north of the Kanto districts, Yamanashi prefecture, Nagano prefecture in and around, ancestor tablet is made more than one and distributed to some of people. Why? Many anthropologists and folklorists were interested in and have been studying. Especially one of missing piece of the puzzle is correlation with social structure of community.

During recent years, I have studied in Konagata, it is a community located in eastern Yamanashi prefecture and discovered *Ihaiwake* here for the first time ever. Then I tried to solve characteristics of it and have given thorough thought to correlation with social structure of community.

Most important factor of forming the social structure of Konagata is *Miuchi* (kin thought of most important, mostly affinity), especially relationship with married sibling and children are emphasized.

On the other hand, when I pay attention to ancestor tablets made as *Ihaiwake* and make sure who distribute them to who, they have been distributed between *Miuchi* and *Miuchi*.

After all, I think that one of the function of *Ihaiwake* is assistance to enhance that kind of social structure of Konagata and another one is to make *Miuchi* impress or recall various ancestors and kins. It is my conclusion.

Keywords : *Ihaiwake*, *Miuchi* (kin thought of most important) , affinity, mutual assistance, social structure of community